

地質ニュース

昭和 59 年 3 月 第 355 号 1984

特集 海洋底をさぐる 58年

海洋地質部の研究の概要 (昭和58年度)	水野篤行	6
深海底鉱物資源に関する地質学的研究 —昭和58年度研究航海(GH83-3)—	野原昌人・奥田義久 西村山宮俊純 山崎純嗣・斎藤文智	12
日本周辺海域の海洋地質調査活動 —昭和58年度の白嶺丸による調査航海—	本座栄一・有田正義 木下泰正・奥史久 玉木賢策	26
海成磷灰土鉱床研究の現状	中尾征三	49
200万分の1海洋地質図の新刊 中部太平洋マンガン団塊分布図 (海洋地質図21)	白井朗 中尾征三 盛谷智之	56
20万分の1海洋地質図の新刊 釜石沖海底地質図 (海洋地質図22)	岡村行信 棚橋学	57
5万分の1地質図幅の新刊 塩竈	石井武政 柳沢幸夫 山口昇一	58

口 絵	深海底マンガン団塊の素顔	白井朗 西村昭
-----	--------------------	------------

編集 地質調査所

発行 株式会社 実業公報社

表紙の写真

南太平洋マンガン団塊濃集地域の海底写真

深海底のマンガン団塊は将来の金属資源として注目を浴びている。1982年には深海底鉱物資源の開発に関する海洋法条約が採択され、すでに基礎調査から探査開発の段階に移行した感がある。しかし海洋の広大さを考えると団塊分布の実態に関する我々の知識は微々たるものといわざるをえない。特に局地的な産状変化や地質環境との対応関係など成因に深い関わりを持つ情報は決して多くはない。地質調査所では中部太平洋海域において、団塊の性状変化と地質環境との対応関係を明らかにすることを目的として団塊採取とともに音波探査・重力・地磁気の測定・熱流量測定・柱状採泥などを行い、地質調査と室内研究を続けている。

写真は白嶺丸、GH 83-3 航海でフリーフォールグラブ（自重で落下浮上し底質を採取する）に取り付けられた深海カメラにより撮影した海底の様子である。団塊濃集率は 30 kg/m^2 を超え、直径 4.5 cm の団塊が互いに接しあうほど密集している。この異常な高濃集は新第三紀以降の強い南極底層流の影響を受けたものと考えられている。白色の点は海水中の懸濁粒子らしい。写真右下のスケールは直径 9 cm 。

(文・写真 白井朗)

4月号予定目次

地質調査所における地下水・地下ガスによる

地震予知研究の概要

エルズルム (トルコ) 雑感

コンピュータを用いた坑井情報の処理と表示

珍らしい「井戸掘絵額」を見て

会話型データ処理 その12

GEOCAPS でのデータ処理の手順(1)

もう一つのヘリウムとメタン (その2)